

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



あした 江都新大橋雪の朝夕 子供遊の図

歌川貞虎
天保期（1830-44）頃

この作品の舞台である「新大橋」は元禄6年（1693）に完成。すでに「大橋」として親しまれていた両国橋に続いて架橋されたため、「新大橋」の名がつけられた。

描いた歌川貞虎は江戸時代後期の絵師で、初代国貞門人。花鳥画、美人画、役者絵、小説の挿絵などを幅広く手掛けている。

雪遊び

寒くても裸足でも
元氣な江戸の子どもたち

近年、東京の雪景色は珍しくなりましたが、江戸時代の冬は今よりもずっと寒かったようです。江戸の出来事を事細かに記録した『武江年表』には、両国川が凍ったとの記載が何度か出てきます。今回の浮世絵は、そんな両国川に架けられた新大橋の雪景色です。

朝焼けが残る空に飛んでいるのは鶴でしょうか。橋の上に見える長い棒は大名行列が掲げる槍の鞘。正月の三が日、江戸中の大名たちは將軍への年始御礼のために、朝早くから江戸城に向かいました。

では子どもたちが元気に遊んでいる橋の袂を見てみましょう。

右の大きな雪玉は子どもたちの背丈を超え、竹ぼうきをテコにしないと転がせないほどの大きさに。かじかんた手に息を吹きかける様子がかわいいですね。

左の二人が担いでいるのは、相撲の「触れ太鼓」に見立てた氷。この氷の立派さからも、冬の寒さが感じられます。

そして、中央の裸足の男の子は、草履を子犬に持つていかれないよう必死な様子。しかもお姉さんの背中から手を伸ばした、小さないたずらっ子にも髪の毛を引っ張られ、万事休すといったところでしょうか。

下の子をおんぶしたお姉さんにもう一人。こちらは仕事途中の小僧さんに雪玉を投げつけるおてんば振りを発揮しています。小さな弟妹の子守をしながら遊ぶ子どもたちの様子は、幕末に來日した外国人たちも記録を残しています。当時の欧米人には、とても珍しい光景だったようです。

江戸ミニ知識

「あした」と「あさ」は同じ意味だった？

作品タイトルにある「あした」（朝夕）という言葉は、古くは「あさ」と同じ時間帯を指しました。しかし「あさ」が明るい時間の始まりを意図するのに対し、「あした」は暗い時間の終わりという意味合いが強かったため、次第に「ある夜の翌朝」から「翌日」、そして「明日」へと、その意味合いが変化していったそうです。参考：『精選版 日本国語大辞典』（小学館）

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note